

どうする？ 子どもの“でべそ”

子ども、特に赤ちゃんには“でべそ”が多く、心配している親御さんは多いと思います。子どもの“でべそ”はそのほとんどが自然治癒しますが、早期の治療が推奨されるものもあります。今回は、その病態や治療法について、小児外科・小児内視鏡外科の石橋診療科長に伺いました。

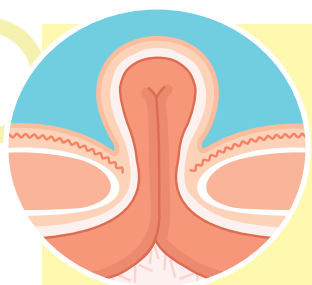


“でべそ”とは？

“でべそ”には「^{さい}臍ヘルニア」と「^{さい}臍突出症」の2種類があります。通常、へその緒(臍帯)が通っていた穴は自然と閉じていきますが、穴が閉じずに空いたままの状態を「臍ヘルニア」と呼びます。臍ヘルニアは、泣いたりいきんだりして腹圧がかかったときに腸が飛び出し、お腹の中の腸が出たり入ったりしてしまいます。臍ヘルニアの原因はよく分かっていませんが、5~10人にひとりの割合でみられ、生後3ヶ月頃までに大きくなり、ひどい場合は直径が3cm以上になることもあります。

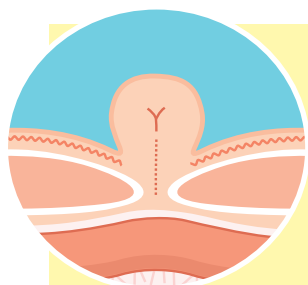
それに対し、「臍突出症」は、穴は閉じているがへそが出ている状態を言い、臍ヘルニアが長期間かけて治癒した場合に起こりやすいです。へそが出ているだけで、病的な状態ではありません。

この2種類の判別ですが、立っている状態と仰向けに寝ている状態で、膨らみの大きさや形が変化するなら「臍ヘルニア」、変化しないなら「臍突出症」の可能性が高いです。



穴から腸管が脱出している

臍ヘルニア



穴は閉じているがへそが出ている

臍突出症



患者さんへひとこと

子どもの“でべそ”に関しては、早期に小児外科を受診することをお勧めします。

■説明は
徳島大学病院
小児外科・小児内視鏡外科
診療科長

石橋 広樹
(いしばし ひろき)

■お問い合わせ先
小児外科外来
Tel : 088-633-7136



治療法は？

2種類のうち、特に治療が推奨されるのは臍ヘルニアです。臍ヘルニアは、2歳までに9割が自然治癒しますが、2歳を超えて治らなければ手術が必要です。また、治癒までに長期間かかった場合、臍突出症が起こりやすいです。そのため本院では、早期に臍ヘルニアを治し、臍突出症を予防するため、乳児期において積極的に「テープ圧迫療法」を行っています。

テープ圧迫療法は、ガーゼ球を使い、臍ヘルニアを強く押し込んだ状態を伸縮性のあるテープで固定し、その上から防水フィルムで保護します。その際、不十分な固定では効果がないので、臍の両端の腹壁を寄せて、腸管がしっかり納まった状態で固定します。本院では、自宅でのテープの貼り替えはせず、週一回通院していただ

き、医師が貼り替えを行います。この治療法による標準的な治療期間は、約1ヶ月(約4回の通院)です。

子どもの“でべそ”は早めの治療が大切ですので、医療機関の受診を考えてみてください。



テープ圧迫療法で使用する
ガーゼ球・テープ・防水フィルム



テープで固定した状態